

## ブルジョア神話への反逆と順応

——D・H・ロレンス『チャタレー夫人の恋人』におけるアンビバレンス

岩井 学

「現代は本質的に悲劇の時代である」と始まるD・H・ロレンスの『チャタレー夫人の恋人』(D. H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover*) は、ロレンスが人生の最後に到達した哲学に基づく現代世界への過激な、しかし真摯な批判でありメッセージであるとしばしば考えられている。そのような捉え方自体は非難されるべきものではなく、またそのように読みうることがこの作品の魅力の一つでもあるだろう。そしてこの作品のインパクトの強さというものは、この小説が大手出版社からは出版できず、私家版としての出版を余儀なくされたこと、さらにその後出版をめぐる裁判沙汰にまでなったことからも窺い知ることができよう。

『チャタレー』には3つのヴァージョンが存在する。1926年の秋から執筆された第1稿、その年の暮れから翌年にかけて執筆され、『ジョン・トマスとレディ・ジェイン』(*John Thomas and Lady Jane*) と(意味深に)<sup>1)</sup> 名付けられた第2稿、そして27年の暮れから翌年にかけて執筆され、現在『チャタレー夫人の恋人』として世に出ている最終稿である。この3つのヴァージョンには、森番の人物造形に重要な違いがあるが、プロットは概ね変わらない。それは上流階級の既婚女性が屋敷の召使である森番と関係を持ち、真の愛に目覚め、夫の元を去るというものであり、当時の読者層である中産階級に嫌悪を催させ、彼らの矜持を買ったのも頷ける。ヒロインのコンスタンス・チャタレー(以下コニー)は、夫とのラグビー邸での生活に常に飽き足らぬものを感じていた。それは夫クリフォードが第一次大戦で負傷し半身不随になってしまったためというよりも、それが象徴する彼の空虚な価値観、虚栄心、傲慢さに辟易していたのである。コニーは屋敷を訪れたアイルランド出身の作家ミケイラスと関係を持つが、それも彼女を満足させることはない。そのような折、自分たちの属する上流階級が失った生命力や優しさを感じさせる森番オリバー・メラーズに彼女はいつしか惹かれ、二人は逢瀬を重ねるようになる。そして二人は過去を捨て共に生きていくことを決意し、将来片田舎の農場で一緒に暮らすことを夢見ながら、

物語は幕を閉じる。

ロレンスが第2稿の『ジョン・トマスとレディ・ジェイン』を完成させた頃、ある旅行記が出版されベストセラーとなった。H・V・モートンの『イギリスを旅して』(H. V. Morton, *In Search of England*) である。モートンはイギリス(イングランド)の田舎町を自動車で周り、土地の人々との出会いのエピソードや田舎の牧歌的な風景を記録していった。この旅行記は1927年に出版されると半年で第3版、5年後には17版、そして1943年には29版まで版を重ね、“motoring pastoral genre” と呼ばれたジャンルの流行に一役買った。

モートンの視点は極めて通俗的である。つまり農業対工業、また田舎に対して産業が発達した都市、といったありがちな二項対立で世界を捉え、産業の発達により古き良きイギリスが失われた、という紋切型の見方を提示する——「ジェームズ・ワットがグラスゴー緑地公園で新世界の着想を得てからというもの、都市と田舎は乖離してしまった。双方互いに理解し合えない状態である。いわゆる産業「革命」以降、……イギリスのカントリー・ライフは衰退し、農業は困難な時期を迎え、村落では過疎化とともに社会の活力がかなりの程度失われてしまったのである」(Morton ix)。このような見方は、イギリスで人種退化が叫ばれるようになった世紀転換期以降にみられた典型例の一つである。人種退化論とは、田舎の「健全な」人たちに対し、都会人は都市の有害な影響により退化しているとする論であり、世紀末から二〇世紀初頭にかけてイギリスで盛んに議論された。イギリスの片田舎に分け入っていったモートンも、やはりイギリス人の人種退化に対する危惧を抱いていた。彼は、田舎に行きイギリスの良さ、イギリスらしさを発見、理解することが人種退化を食い止める一つの方策であると考えていたのである——「都会は農業の抱える問題を理解すべきである。というのも今日のイギリスのように田舎の生活が衰退し、都市が栄えると、国家の性格や体格も衰弱していくからである。……「田舎へ帰ろう」という声は、人種再生のための全くもって健全なる本能の叫びなので

ある」(ix-x)。

モートンは、「血」や「復活」といったロレンスがよく使う言い回しを用いて、「健全」な田舎こそイギリス人の生活・生命に活力を与えるのであり、それによって都市の有害な影響を克服することができると論じる。

しかし国家にとっての健全な田舎の必要性がご納得いただけるのなら、すべての国民がこの問題について考えをめぐらせ、取り組む義務があるということもまた当然ご理解いただけるだろう。男性も女性も……大勢でイギリスの田園に押しかけ、その地が……生命に満ちていることを知れば、……理想的な国家の姿に一歩近づいたことになる。つまり一方には富を生み出す産業都市、そしてもう一方には幸せに満ちた田園地帯。この田舎のおかげで新たな血液が都会へと供給され、民族の伝統が守られる。田舎は、再生を必要とする都市の第三世代をいつでも腕を広げて待っているのである。(x)

この旅行記が人気を博したのは、自動車が中産階級の余暇の活動として普及していった時期と重なっていたという点もさることながら、読者の間にも広く人種退化への恐れが共有されていたという点もその大きな要因として挙げることができるだろう。

このモートンの旅行記と『チャタレー夫人の恋人』を並べてみると見えてくることがある。それはまず、『チャタレー』でも一見、自然対産業などの二項図式が採用されているように見えながら、モートンとは異なりそのような図式は解体されていくという点である。またその一方で逆に、『チャタレー夫人の恋人』というテキストにも、モートンのベストセラーに見られた、当時流布していた思考の枠組み、中産階級のイデオロギーとの意外な共振性も垣間見える。本稿では、「ロレンス哲学」に引きずられすぎず、二〇世紀初頭という時代の社会的、文化的文脈にテキストを置き、『チャタレー』におけるアンビバレンス、つまりこのテキストが、一方では中産階級の読者層に対して挑発的な筋立てでありながら、同時に当時の中産階級の思考の枠組みや価値観を内包していることを論じたい。

## I. 二項図式の無効化

『チャタレー夫人の恋人』は、紋切型の二項図式で

しばしば捉えられてきた<sup>2)</sup>。しかしそれ以前のロレンス作品とは異なり、『チャタレー』においては単純な二項対立は次々と無効化されていくのである。例えば階級間の対立。ロレンスのテキストでは、屋敷の描写が階級間の関係を比喩的に表すことがしばしばあり、『チャタレー』にもそれが当てはまる。物語冒頭では、チャタレー家の所有するラグビー邸と炭坑夫たちの住居とが対比されているが、それは単なる対立ではなく、むしろ両者に繋がりがあることが暗示されている。

ラグビー邸は高台に建ち、周囲にはオークの木々に覆われた歴史ある見事な領地が広がっていた。しかしなんとたことか、蒸気と煙を雲のように吐き出すテヴァシヤル炭鉱の煙突がほど遠からぬ所に見える。その向こうの霧と霞のかかった丘の上には雑然と家々が広がるテヴァシヤルの村。敷地の入口の辺りから始まり、希望のかけらもない醜さの中を陰鬱に一マイルほどだらだらと広がる村。煤けて黒ずんだレンガ造りの小さな家々が打ちひしがれた様子で何列も並ぶ。蓋のような鋭角の黒いスレート屋根とともに、無表情で頑なな陰鬱さを醸し出していた。(LCL 13; 強調引用者)<sup>3)</sup>

威厳を放つラグビー邸と醜悪で陰鬱な炭坑夫たちの住居が対比されているが、炭鉱地域が上流階級のテリトリーを侵食していくというこれまでのロレンス作品に見られる構図ではなく、むしろ炭鉱地区が屋敷の入り口から始まり、田園地帯の方に広がっていくことが暗示されている。またクリフォードの名付け親であるレズリー・ウインターのマナーハウスの描写においても、上流階級の屋敷と炭鉱地域との相互依存が暗示され、両者の間に境界は事実上存在しないかのようである——「敷地の裏手の門は、石炭を運ぶ機関車が通る踏切のすぐ近くにあった。シプリー炭鉱自体も木立のすぐ向こうにあった。門は開放されていて、敷地の中を坑夫たちは自由に往き来することができた。敷地内にはぶらつく彼らの姿があった」(156-57)。

これらの屋敷の描写が暗示するように、『チャタレー』においては上流階級と労働者階級の関係は単純な対立として描かれてはいない。炭鉱産業を推し進める上流階級とそこで働く労働者階級は、対立ではなく相互依存の関係にある。ヒロインの夫であるクリフォードはケンブリッジ大学で2年間学んだ後、当時工業の最先端であったドイツに渡り、ボンで炭鉱業について専門的に学んだ。その後彼はイギリスに戻り炭鉱経営にの

めり込み、会社の近代化、機械化を強力に推進していく。しかしこの作品では、クリフォードだけでなく、ウィンターら他の地主たちも炭鉱経営に熱を上げている。さらにウィンターの屋敷を訪れた英国皇太子までもがこのようにのたまう——「もしサンドリングムの下に石炭が埋まっていたら、芝生の上から炭坑を掘って第一級の造園術を楽しむのだがなあ」(157)。『チャタレー』では支配層と労働者たちが相互依存し、イギリスの地方の風景を変貌させていく。炭鉱業に携わる両階級は、共犯関係にあるのである。

マナーハウスと炭鉱地区の描写に示唆されていた支配階級と下層階級の相互依存は、主要登場人物たちを通して描かれていく。チャタレー家には「はっきり言って不十分な収入」(5)しかなく、ラグビー邸での生活は炭鉱業での収入によって維持されている。確かにクリフォードはその後、チープな小説を量産する大衆小説家として成功し、年に1200ポンド稼ぐようになる。しかしこの収入も、実は妻の不倫相手であるミケイラスに負っている。ミケイラスはアメリカで成功した戯曲作家だが、元々はアイルランドの下層階級出身であり、「下劣な成り上がり者といった言葉がまさにぴったり」な「ダブリン出のみすぼらしいなりをしたドブネズミ」(20)と描写される。この「救いようのない侵入者」(21)がコニーと関係を持ち、クリフォードは惨めにも寝取られ男となってしまう。しかし皮肉にも、自信と快活さを取り戻した妻の放つ活力がクリフォードのインスピレーションの源となる——「満足感と鋭敏な感覚を呼び覚まされたコニーは全力でクリフォードを刺激した。そのため彼はこの頃最も脂がのっていて、完璧に近い奇妙な盲目的充足感を味わっていた。妻の中にいきり勃った横たわるミケイラスから彼女が得た官能的悦びの果実を彼は見事に刈り取ったのである」(30)。妻が味わった興奮を糧にして、クリフォードは小説を量産していく。

『チャタレー』には、主と奴の弁証法的状況は他にも枚挙にいとまがない。クリフォードは、自分の身の回りの世話をするボルトン夫人に、物理的にも精神的にも完全に支配されている。「主人に全身全霊で献身的に使える」ボルトン夫人は、主人のプライドを満足させ、そしてまた彼のヒステリーにも巧みに対処する(100)。その結果、彼はこの介護人に完全に手名付けられてしまう。

これ以降ボルトン夫人といるときのクリフォードは、子供のようにだった。彼女の手を握り、顔を胸

に押し当て、さらに軽くキスされたときなどは、「もっとチューして、チューして」と言ったものだ。がっしりした色白の肉体を拭いてもらっているときにも、同じように「チューして」と言った。……奇妙なほどに子供のような純真な顔に、子供のように不思議そうな表情を湛え、彼は横たわった。そして聖母マリアを崇拝しているときに見せるような、安心しきって大きく見開いた子供のような瞳で夫人をじっと眺めるのだった。(291)

クリフォードにとってはまたオリバー・メラーズも欠くことのできぬ存在である。森番は、人間から自然を守る、といったような自然の守護神なのでは決してなく、領主のために森を守っている。つまり領地に侵入する密猟者から森を守り、また貴族たちの楽しみである狩のために獲物である雉を育てることが仕事である。クリフォードとメラーズの関係を示す最も象徴的な場面は、クリフォードの電動車椅子が森の中で立ち往生し動けなくなってしまうシーンである。メラーズは車椅子を押し、主人を屋敷まで連れ帰り、この「囚われの者」(189)を解放する。この森番なしには、クリフォードはもはや自分の所有地すら自由に移動できないのである。さらに、半身不随となってしまった今、皮肉にもこの森番が妻に孕ませた子供がラグビー邸の唯一の跡取りとなりうるのである。

二項図式が無効化されていくのは、階級間の対立だけではない。森の自然と炭坑の機械も同様である。確かにコニーは、ラグビー邸の自分の部屋の中にまで炭鉱の機械音が響き、そして硫黄や鉄の不快感な臭いが忍びこんでくる様に辟易する。

ラグビー邸のやや陰鬱な部屋でコニーは、選炭用の篩ふるいがガラガラなる音、巻上げ機の規則的な音、方向を変える貨車のガシャンガシャンという音、そして石炭を運ぶ機関車のかすれた小さな汽笛を聞いていた。……そして風向きによっては、実際度々なのだが、大地からの排泄物が燃焼する硫黄臭が家中に充満するのだった。しかし風のない日ですら、硫黄、石炭、鉄や酸といった地中の物質の匂いが常にした。そしてクリスマスローズにすら、呪われた空から降ってきた黒いマナのように煤がこびりついていて、ありえない状態だった。(13)

しかしコニー自身、炭坑から掘り出されたボタが敷か

れた小道がお気に入りである。屋敷から門までのその散歩道は天気によって色が変わり、コニーを魅了する——「ピンク色の可愛らしいリボンのように、一本の小道が庭園を横切って森へと抜ける門まで続いていた。ボタ山から篩にかけた砂礫をクリフォードが最近敷きつめたのである。地下から掘り出された廃物の塊は、燃えて硫黄を放出すると鮮やかなピンク色に変わり、晴れの日にはエビのような色に、湿りがちの日にはカニのような暗めの色になる。今日は淡いエビの色で、青味がかかった白霜も降りていた。砂礫でできた足元のこの明るいピンク色を見ると、コニーの心はいつも浮きたつのだった」(41)。

また森番は、近代化された炭鉱産業が自分の神聖なる世界を侵しているように感じる——「森番は再び隔離された森の闇へと入っていった。しかし森が隔離されているというのは幻想に過ぎないと彼には分かっていた。産業機械の音が静寂を破り、見えない鋭い光がそれを嘲笑った。……これらが、これらが歯車を狂わせるのだ、邪悪な電気の光が、発動機の悪魔のような唸り声が」(119)。しかし語り手はこれに反し、石炭の採掘が森に活気をもたらす様子を描写する。石炭採掘時に縦坑の立てる音、エンジン音、機関車の汽笛がなければ、森は生気を失うのである。

じめじめした空気は死んだように動かなかった。まるで世界の全てのものがだんだんと死にゆくかのようにだった。陰気でじめじめして、炭坑の規則的な機械音すら聞こえなかった。というのも操業時間が短縮されており、今日は全面的に休止していたからである。万物が終焉を迎えた！

森では、全てのものが正気を失い、動く気配がなかった。ただ大きな雫が枯れ枝から落ち、微かに虚ろな音を残した。それを除けば、老木の茂みの中は、希望の感じられないくすんだ無気力、静寂、虚無の深淵が支配していた。(65)

以上のように『チャタレー夫人の恋人』では、単純な二項図式——マナーハウスと炭鉱地区、上流階級と労働者階級、近代産業が象徴する機械と森の自然——はしばしば失効し、双方は対立ではなく相互依存し、そして両者の境界は曖昧にされていくのである。

## Ⅱ. 上流階級・下層階級表象とそのオーバーラップ

クリフォードに代表される上流階級は、このテキストの中では一貫して批判的に描かれている。自分の狭い世界の価値観でしか物事を判断できず、人間的温かみや誠実さに欠け、労働者を搾取し、自分に仕える召使に依存しながらも傲慢である。クリフォードの半身不随は、彼の精神的な歪みを象徴している。ロレンス流の生命主義を踏まえ、ここに作者の上流階級批判を読み取るのが常道でありそれを必ずしも否定するものではないが<sup>9)</sup>、しかしながらこの貴族階級のイメージは、作者ロレンスのユニークな視点によるものというよりも、当時広く流布していた上流階級観と多くの点で合致する。

この作品の執筆から時は20年近く遡るが、1909年、人民予算を国会で通すためのキャンペーンをしていたデイヴィッド・ロイド・ジョージは、ライムハウスにおいて有名なスピーチをする。彼のこのスピーチが今でも記憶されているのは、地主階級に対する歯に衣着せぬ、容赦ない批判のためである。そのスピーチの中で上流階級は、怠惰で自己中心的、傲慢で強欲な有閑階級であり、「その唯一の機能、その誇りの礎は、他人が生み出した富を大量に消費することである」(Parcq 682)と揶揄される。そしてその批判の矛先は、クリフォードのような炭鉱業を牛耳る地主へと向かう。

地主たちは鉱山使用料として年に800ポンドも懐に入れていた。何故に？ 地主たちが地中に石炭を埋めたわけでは決してない。ウェールズに花崗岩の巨大な塊を埋め込んだのも彼らではない。誰が鉱山の礎を築いたのだ？ 地主たちか？ にも関わらず、地主は、よく分からない神聖なる権利によって——これらの岩を砕く男たちが命を賭ける権利と引き換えに——使用料として年800ポンドも要求するのだ！ ……命を賭けて自分たちのために富を生み出す人たちに対する責任を、もしこの程度のものだと地主たちが考えているのなら、言わせてもらおうが彼らがその報いを受ける日も近いだろう。(Parcq 684)

実際のところ、このような上流階級のネガティブなイメージは目新しいものではなく、世紀転換期からすでに見られたものといえる。例えばジャーナリストであ

り自由党の政治家でもあったC・F・G・マスターマンは1901年に出版された『帝国の要』(*The Heart of the Empire*)の序文で次のように書いている。

物差の反対側に目を移せば、富を持つ大多数の人々の生き方は、全く満足できるものではない。人生という現実の多くから目を背けている彼らは、金銭の常識的な使い方を知らず、その結果、奢侈に流れたり、品のないひけらかし (display) に浸りきっている。……自分たちの階級の因習に支配され、自分たちに仕える使用人の奴隷となり、美しいものを真に見分ける鑑識眼を大抵欠いている。彼らは、幸福の至高の形がどのようなものであるかを知らず、活力とチャンスをみすみす無駄にするという人生を送っているのである。それは万人にとっての損失である。(viii; 強調引用者)

労働者から搾取した富で奢侈に流れ、人生にとって真に大切なものは何かを理解できない貴族たち——コニーの眼に映るクリフォードの姿そのものである。『チャタレー夫人の恋人』の中にこのパッセージが挿入されていたとしても、違和感は感じられないだろう。この引用の中に、上流階級は皮肉にも「自分たちに仕える使用人の奴隷」となっているという表現がある。このイメージは、例えばH・G・ウェルズの『タイム・マシン』やP・G・ウッドハウスのジューズ・シリーズ等を通して世紀末から二〇世紀初頭に再生産されていった。先ほど見た『チャタレー』の中での階級間の支配／被支配の構図の転覆も、このイメージをデフォルメして戯画的に描いているといえよう。このようにクリフォードの人物造形は伝統的な上流階級観に合致しているのである。

『チャタレー』でもう1つ目を惹くのが、労働者階級の描写である。この小説の中には、登場人物の目を通して炭坑夫たちがやや唐突に、数ページに渡って延々と描写される場面が二箇所ある。一つはコニーによって、もう一つはボルトン夫人によって語られるシーンである。まず前者であるが、まるでモートンの旅行記のカリカチュアであるかのように、コニーは車でミッドランズの炭鉱地帯を回り、炭坑夫たちを俯瞰的な視点から他者として観察する。奇妙な生き物のように見える炭坑夫たちに彼女は好奇の目を向けながらも、嫌悪感を抱かずにはいられない。

テヴァシャル村、これがテヴァシャル村だわ！

古き良きイギリス、シェイクスピアのイギリスかしら！ いいえ、今日のイギリスの姿だわ。コニーはここに来て住むようになって以来、こう考えるようになっていた。ここでは新たな人種が生み出されている。お金や社会と政治には意識過剰で、でも自発性と直感力は完全に死に果てている。誰もが半分屍のようなもの。でも残りの半分は執拗に自己主張する意識。これら全てどこか不気味 (uncanny) で地下の暗黒を思わせる。地下の世界。とても計り知れない。半屍の反応などどう理解したらいいのかしら。巨大なトラックがシェフィールドの製鉄工を満載して走っていった。マトロックの現場へと向かう、異様 (weird) で、人間の姿をした振じくれた小さな生き物たちを見たとき、コニーの気持ちは萎えた……。 (153; 強調引用者)

描写が進むにつれコニーの視点は語り手の声とシンクロし、下層階級に対するテキストの基本的スタンスが露わになる。

この世界は複雑すぎて異様で薄気味が悪い！ 夥しい数の民衆がいて、本当に恐ろしい。帰途についてコニーはそう考えながら、黒くくすみ (grey-black) 振かれて、肩をはすかきに傾け、鉄鋌を打った重い長靴を引きずりながら炭坑から帰る坑夫たちを見ていた。地下世界のくすんだ顔、白目をぎよろつかせ、坑内の低い天井のせいで前かがみで猫背になった坑夫たち。あの男たち！ ……彼らも子供を儲けるだろう。彼らの子供を授かるかもしれない。考えるだに恐ろしい！ 善良で親切な人たちではある。しかし半分でしか、人間のくすんだ半分でしかないわ。……コニーは産業の生み出した群衆 (masses) に心底恐れおののいた。彼らはとても異様に感じられた。その人生には美のかけらも本能もなく、常に「坑内」で過ごすのである。……

人間の姿をした醜悪、しかし生きているのだ！ 彼らの行く末は？ 石炭がなくなったら、この地上から再び姿を消すのかもしれない。石炭に寄せられたように、彼らはどこからともなく群れをなして現れたのだ。炭層の隙間から出てきた異様な動物相に過ぎないのかもしれない。別の現実の生き物 (creatures)、石炭という精に仕える霊なのかもしれない。……彼らにはある意味鉱物の

持つ人間離れした異様な美しさがあるのかもしれない。石炭の輝き、鉄の重みと青白さと強さ、ガラスの透明さを宿しているのかもしれない。鉱物世界の異様で振くれた霊のような生き物！ 彼らは石炭、鉄、泥土に住みついているのだ、魚が海に、芋虫が朽ちた木に住みついているように。朽ちていく鉱物から生まれた魂なのだ！ (LCL 159-60; 下線原文, 傍点引用者)

炭坑夫たちは不気味で異様な集団、地下世界に住む別人種として描かれている。この下層階級のイメージは、『チャタレー』独特のものというよりも、19世紀末から中産階級の社会改良家たちによって再生産されていったものと重なり合う。彼らは、ヘンリー・M・スタンリーのアフリカ探検記のタイトル『暗黒のアフリカ』をもじって下層階級の世界を「暗黒のイギリス」と形容しそこに入り込み、その生態をセンセーショナルに描いて世に広めた。ボルトン夫人から労働者たちの実態を聞いたコニーが、「それはイギリスの村というよりもまさしく中央アフリカのジャングルの話のようだった」(102)と反応するように、『チャタレー』における炭坑夫表象は、ブルジョア社会改良家たちのそれと重ね合わされているのである。この「社会改良家」たち、そして彼らの言説を消費する中産階級たちの視点では、労働者たちはあくまで他者であり、彼らは自分たちとは異なる人種として好奇の目で観察される。その劣悪な生活環境や生態は恐怖や戦慄を催させるものであるが、同時に観察者、そして読者のエキゾチズムや好奇心を刺激する。19世紀末以降の典型的な下層階級表象の例として、再びマスターマンによる、今度はロンドンのスラム街体験記『奈落からの報告』(From the Abyss, 1902)の一節を参照してみたい。地方の炭坑夫と都市の労働者という違いはあるものの、両者の描写には酷似したイメージが使われている。

我々の知る、親切で親しみ溢れるロンドンを取り囲む未知のエリアから、ある音と共に何か、予告もなく不意に動き出す。……我々の街路は突然異様 (weird) で不気味 (uncanny) な人々で溢れかえる。東側の線路の脇から、黒い群衆 (black masses) になって押し合いへし合いしながら彼らは雪崩れ込んでくる。川の向こうの沼地や荒廃した場所から橋を渡って流れ込んでくる。側溝から這い出してくる鼠のように、大地の腑に開けた地下道を通して、日光に目を瞬かせながら、信じ

られないほどの数が我先にとやってくる。……彼らはどこからやってくるのだろうか、この奇妙な行動形態を持つ生き物 (creatures) は？ これら別世界に生息する彼らは？ 慣れない太陽の光、街の広場や公園に怯えた彼らは、自分たち自身の持つ力にも半ば恐れをなしているように見える。……闇の帳が降りて初めて彼らの不安げな様子は消え、暗闇の中でますます奇妙で野蛮な狂躁を繰り広げる。(From the Abyss 2-3; 強調引用者)

このように「異様」、「不気味」、「群衆」、「黒」、「生き物」といった共通の語彙が使われているだけでなく、そのイメージも奇妙にも符合する。彼らはどこからともなく群れをなして出没する不吉な生き物であり、「我々」支配層にとって不快と脅威を催させる暗黒の地下世界の住人である。『チャタレー』の中でコニーによって長々と語られる炭坑夫の描写は、ロレンス自身のゼネスト後の経験にその理由がしばしば求められるが<sup>5)</sup>、それはむしろ前世紀末からの中産階級による典型的な労働者階級像である。以上のように、『チャタレー』における貴族階級と下層階級の描写には、イギリスの中で広く流布していた階級表象が使われているのである。

『チャタレー夫人の恋人』における階級表象のユニークな点は、両階級の表象が、交差してもう一方の階級の描写に使われていくという点である。つまり上流階級表象が下層階級に、そして下層階級表象が上流階級にオーバーラップされていくのである。炭坑夫が描写されるもう一つの場面、すなわちクリフォードの介護役としてラグビー邸で働くボルトン夫人が炭坑夫たちの実態を、主人であるクリフォードに延々と語るシーンを見てみたい。彼女が語るのは、自分たちの外の世界に目を向けず、能天気にも有り金を散財する労働者たちの姿である。

「彼らは真面目に何かしようなんて決して考えないですよ。ただバイクに乗って格好つけたり、シェフィールドのダンスホールで踊ることだけ。真面目にさせることなんてできやしませんよ。真面目な子たちでさえ夜会服で着飾ってホールへ繰り出して、女の子たちがたくさん集まる前で最近のあのチャールストンとか何とか踊るんです。……過激な政治思想にかぶれたりなんてないですよ。男の子たちはただお金稼いで楽しみたいだけですからね。女の子も同じ、きれいな洋服が欲

しいだけです。それしか頭にはないんですよ。社会主義なんて頭の片隅にもありません。本当に重要なことでも真面目に考えようとしません、この先も変わりゃしませんよ。」(LCL 104; 強調原文)

ボルトン夫人はこのように、炭坑夫たちには真面目に自分の生き方、人生について考える姿勢など毛頭なく、男も女も着飾ってダンスホールに行き踊る事しか頭がないことを、改行のほとんどない文章で延々と述べている。彼女の語る労働者たちは、先にマスターマンが描いた上流階級像——「人生という現実の多くから目を背けている彼らは、金銭の常識的な使い方を知らず、その結果、奢侈に流れたり、品のないひげらかしに浸りきっている」——を体現したような生き方をしている。

一方クリフォードの介護をするうちに、ボルトン夫人は自分の主人が「結局は炭坑夫とたいして違わない」(LCL 83) ことに気づく。この発言を裏付けるように、テキストの中でクリフォードが描写される際に、労働者階級表象のキーワードであり、コニーが炭坑夫たちを描写した際にも使用されたのと同じ語彙が使われる。それは“uncanny”と“weird”である。売れっ子小説家として成功するクリフォードはコニーの目を通して次のように語られる。

クリフォードは成功したわ。物質的成功を手に入れた。確かにかなり有名になって、本の印税は1000ポンドにもなった。そこら中に彼の写真が掲載された。あるギャラリーでは胸像も展示されて、肖像画の方は二つのギャラリーにお目見えした。時代をリードする現代の声と思われてる。彼には注目されることへの不気味(uncanny)で歪な本能があって、ここ四、五年で若手の中でも最も名の知れた「知識人」となった。その知性はどこから来るのかしら。コニーにはよく分からなかった。クリフォードは確かに軽やかにユーモアを交えて人物や行動原理を小器用に解剖するのがお得意だけど、最終的には全てを辛辣に引き裂いてしまう。まるでソファのクッションを引き裂く子犬みたい。でも彼には無邪気な若さはなく、奇妙にも年寄りじみでいて、むしろ偏屈な虚栄に満ちているわ。異様(weird)で何の意味もない。これが、コニーの魂の奥底に何度も繰り返し響いていた感覚であった。全ては無意味。意味ないことをお見事にひげ

らかして(display)だけ。彼のしているのは、ひげらかしだわ。何もかもがひげらかし！(LCL 50; 強調引用者)

マスターマンによる上流階級表象で使われていた「ひげらかし」とともに、下層階級表象で使われていた「不気味」、「異様」が使われている。実際、(コニーにとって)退屈な朗読を終えて妻を眺める彼の瞳は「青白い不気味な瞳」である(138)。また炭鉱のマネージメントに彼は「不気味ともいえる巧妙さ」と「不気味ともいえる鋭さ」を発揮し、そして「彼の不気味な物質的力」で幹部たちをまとめていく(107, 291, 110)。「異様な車椅子号」と形容される電動車椅子に乗った夫との生活にコニーは「異様な嘘、そして愚蒙の驚くべき残酷さ」に押しつぶされそうになる(185, 112)。また下層階級が常にそう見られていたように、クリフォードにも未開民族のイメージが重ね合わされる。彼は妻を「野蛮人のように、奇妙に怯えながら偶像のごとく崇拜」するのである(111)。

このように『チャタレー』では、労働者階級の描写に上流階級表象のイメージが重ね合わされ、そして逆に上流階級の描写には労働者階級の表象が重ね合わされていく。この階級表象のオーバーラップによって両者の差異は解消に向かい、上流階級／労働者階級の二元論は融解する。実際コニーは、炭鉱町の労働者階級と、ロンドンのファッショナブルな地域に住む上流階級の差異などすでに消失してしまっただけに感じる——「下層階級も他の階級と驚くほど変わらないわ、とコニーは考えた。テヴァシャル村だろうと、メイフェアだろうとケンジントンだろうと。最近はたった一つの階級しかない。それは金の亡者。金に飢えた男たちと女たち。唯一の違いは持つてる額と、どれだけ欲しがるかだけ」(105)。

### Ⅲ. 森番の人物造形とその変遷

では本来労働者階級であるはずの森番オリバー・メラーズはどのように造形されているだろうか。実は『チャタレー』というテキストにおけるアンビバレンスを最もよく体現しているのがメラーズである。なぜなら彼の階級的属性は意図的に曖昧にされているからである。イギリスでは話し言葉で階級が分かると言われるが、メラーズはスタンダード・イングリッシュからミッドランズ方言まで自在に使い分ける。コニーが森番に抱いた第一印象は「全然森番に見えないわ、ど

う見ても労働者階級には見えない」であり、夫に「森番のメラーズは変わった感じの人ね……ほとんど紳士みたいじゃない」(68)と言う。また奨学金を得てグラマー・スクールへと通った彼は、労働者階級には想像できないほどの知性と教養を兼ね備えており、政治や化学から小説に至るまで実に様々な本が今でも彼の書棚を占めている。また第一次大戦では士官にまで登りつめた。このようにメラーズは、階級の枠には収まらない人物として造形されているのである。

実は森番は、創作の初期段階ではこのような人物ではなく、純粋に労働者階級出身者として造形されていた。『チャタレー夫人の恋人』に登場するメラーズは、この小説の完成稿以前のヴァージョンの森番と比較すると、際立った対照性を示す。そこでまずこの人物がどのような変遷を経てオリバー・メラーズとなったかを確認し、その上で完成稿における彼の表象の意味について考えてみたい。

まず大きな違いとして、第1, 2稿では森番はメラーズではなく「パーキン」と命名され、純粋な労働者階級の人物として造形されていた。メラーズとパーキンの違いは、例えば後者は常にひどいミッドランズ訛りで喋り、スタンダード・イングリッシュはほとんど話さない。また彼には自分の属する階級の所作が染み付いており、19世紀末の社会改良家よろしくパーキンたちを観察するコニーには、彼は典型的な労働者階級以外の何者でもない——「労働者の男たちがするように、彼はズボンのポケットから小銭を出して彼女のトラム代を払った。トラムは混んでいて、彼女にはとても馴染めなかった。乗客たちはズルー族かエスキモーかというほど、彼女には馴染めなかった。いや、それ以上に異質だった。何しろ彼らの洗練さといったらむしろ異様 (weird) だったから」(FLC 171-72; 強調引用者)。

実際のところこの初版では、階級間の不信と軋轢がテキスト全体にこだまし、それは森番が抱く支配層への憎悪に収斂されている。

パーキンは、彼女とクリフォードに強烈な訛りで話した。近頃この辺りの人たちがやるように、彼もわざとそうしているのだ。それはなよなよ話す金持階級への一種の当てこすりであり、ある種の侮蔑を込めた挑発的態度なのである。彼は素晴らしい森番で、森を自分の領地のように手をかけ、誰にも決して手出し口出しさせなかった。そして彼は、鳥が卵を暖める時期にコニーが森の中を歩

き回るだけで腹を立て、またクリフォードの電動車椅子を憎んでいた。(FLC 31)

不倫騒ぎのため森を去った後、彼は工場労働者となり、社会主義運動に身を投じるようになる。二〇世紀初頭、社会主義は支配階層から、時にアナーキズムやボルシェビズムと同列に扱われ、危険視されていた<sup>6)</sup>。パーキンはコニーの友人であるダンカン・フォーズに、共産主義に対する強い思いを明かす。

「それは別問題です」とパーキンは声を抑えていった。「私は同志のために、仕事仲間で作った共産主義同盟で書記をしているのです。」……

「へえ！ それでロシアみたいな評議会をお望みかい？」

「ええ、労働者は自分の仕事を売っちゃあいいけません、自分の魂を売るとおなじです、そんなことしたら。我々は労働を分け合い、全てに和気あいあいとやっていくのです。しかし他者の利益のために自分たちの仕事を売ることはしないのです。」

「ロシアみたいになりたいのかい？ 例えば上流階級を皆殺しにするとか？」

「いえ、やつらを殺す必要はありません——まあ何人かは別でしょうが。」(FLC 206-07)

このように純粋に労働者階級であり、支配層にとっては危険分子ですらある森番は、改稿を経るに従い階級的属性が剥ぎ取られ、最終稿ではどの階級の範疇にも収まらない人物となる。これにより結果的に、読者層である中産階級を当惑させるような森番の挑発的要素は希釈されている。

メラーズは、カナダにいる知り合いの伝手を頼ってカナダ移住を計画し、それを知ったコニーもカナダへの移住に希望を膨らませる。このことから重要な意味を読み取ることができる。世紀末の人種退化論は、イギリスの移民政策にも影響を与え、そこに社会の下層民を排除するという政治的意図が含まれるようになっていった。貧民の大規模な国外移住を唱えていた救世軍の創始者ウィリアム・ブースは、1890年に出版された著書『暗黒のイギリスとその処方箋』の中で「移民政策は社会にはびこるこの害悪の唯一の治療法である」(145)と主張し、実際救世軍やバーナードーズといった慈善活動団体は植民地までの孤児の旅費を肩代わりした。また1891年には感化院及び授産学校法ができ、



校長が非行の子供を植民地へと送ることができるようになった。このような状況の中、1870年からの60年の間にカナダだけでも10万人がイギリスから移住した<sup>7)</sup>。

しかし世紀が変わると移住に対する意味合いも変化していく。1920年代に入るとカナダでは、移民の流入が優生学的な見地から問題視され始める。当時カナダで最も有名だった精神科医チャールズ・カーク・クラークらがこの問題を提起した。彼らの研究によれば、移民の子供たちには高い確率で非行、不道徳、精神薄弱が見られるとし、クラークらは公衆衛生のためとして不妊治療および移民制限を主張した。この精神科医は1923年にモズリー・レクチャーに招聘され、ロンドンで講演をおこなったが、その様子は5月25日付の『タイムズ』で報じられている——「カナダがやるべきことは」と彼は論じた、「人間を汲み上げることだ、とラドヤード・キプリングや他の狂信者たちがおっしゃるのは別に構いません。確かにその通りです。しかし同時に、その吸引ポンプが障害者、身体的に退化した者、社会の落伍者らによって汚染されないようにもしなければなりません」(“Canada’s Nordic Needs” 11)。また翌日の同誌によれば、クラークは統計のデータを示し、カナダの「精神薄弱」な児童の3/4が近年移住した者の子供であり、「カナダ自治領は、知的あるいは道徳的に不健全な者たちが流入することを防ぐための手立てを講じる必要があるのだと強く弁じ立てた」(“Immigration and the Unfit” 11)<sup>8)</sup>。このような優生学的見地からの移民制限はカナダのみで行われていたのではなく、例えばアメリカでも移民制限法が1924年に制定されている。

このように1920年代になると、移民政策は社会の安寧を揺るがしかねない者を排除するための方法ではなくなる。むしろ優生学的に問題のない者しか移民として移住できなくなる。つまり20年代後半に移住という選択肢を持つメラーズは、象徴的にも実際にも子孫を残せなくなってしまったクリフォードとは対照的に、世紀転換期以降イギリスで懸念されていた人種退化とは無縁の、優生学的にも問題のない人物といえる。危険度が希釈された最終稿のメラーズは、上流階級の夫人と関係を持つという社会の安寧を揺るがしかねない人物でもあるが、同時に理想化された「健全な」イギリス国民としての表象をも併せ持っているのである。人種退化を考えた時には、イギリスとしてはむしろこのような人物には国内にとどまってもらった方が都合が良い。そして実際メラーズは、最終的にはイギリスにとどまることを選択するのである。

この物語のエンディングは、実は第2稿と最終稿で大きく異なっている。第2稿の最終章では、コニーとパーキンが将来について話し合うために「暗澹とした、気の滅入るような小さな炭鉱街」であるハックノルで落ち合う(FLC 565)。コニーはパーキンに「あなたの腕に抱いてもらえるところへ連れてって」(FLC 568)と言い、二人は森へ行き、愛を交わし合う。しかしながら二人の前に森番が突然現れ、逢瀬半ばにして二人は森から追い払われてしまう。このシーンが明らかにするのは、森はもはや愛するものたちにとっての聖域ではないという事実である。森や樹木には、古来から生命力、生殖、再生といった象徴的価値が付与されてきた<sup>9)</sup>。しかしこの小説の結末では森の象徴性は剥奪されており、二人は愛を成就させることはできない。楽園を喪失した二人はとぼとぼと森を後にする。

『チャタレー』において、森はすでに理想郷ではない。森は地主のエゴによって、ある時は荒らされ、またある時は保護される。戦争が始まれば、愛国心かられた地主によって塹壕建設のため木々は伐採され、戦地へと送られる。戦争がひとたび終われば「イギリスの心の拠り所」を復活させるために再び植林される(42)。森では雉が育てられ、コニーはその雛の温もりを掌に感じ涙するが、実際のところその雉は領主たちの狩の獲物として育てられている。森は森番によってだけでなく、詮索好きなその妻や郵便配達夫によって監視されている。森は領主の電動車椅子によって、また密猟する労働者によって、実際にも象徴的にも踏み荒らされる。森はもはや再生のための神聖な場所ではなく、上下両階級によって荒らされ、そして汚された場所なのである。このことを明確にする第2版の結末は、イギリスの田舎に理想郷を見出そうとする中産階級にとっては挑発的なエンディングである。第2版はそのタイトルからエンディングまで、過激さに満ち溢れている。

しかしながら完成稿では結末が差し替えられ、森がすでに楽園ではないという事実は曖昧にされる。『チャタレー夫人の恋人』の結末はコニーに当てたメラーズの手紙であり、その中で田舎の農場でささやかに農業に勤しむ森番の生活が描かれる。カナダ移住の件は立ち消えとなり、二人は離婚の片が付き次第「自分たちの小さな農場を持つ」ことに夢を膨らませる(LCL 298)。人種退化が叫ばれるようになって以来、モートンの旅行記に見られたように、「退化した」都市の住民とは対照的に、田舎の農民が「健全なる」イギリス人として理想化されていった。それゆえ最終稿の結

末は、人種退化神話を信じ、イギリスの田舎を美化し、農民を都市の有害な影響に毒されていない健全な国民と理想化する中産階級の価値観と合致するものとなる。コニーのクリフォードからメラーズへのシフトは、すなわち産業や森を捨て、田舎の農家への移行を象徴的に表すのであり、20世紀初頭に流布していたブルジョア神話を強化する。

『チャタレー夫人の恋人』は、ロレンス流の哲学、すなわち生／性の賛美、上流階級に対する呵責なき批判、そして大切なものを見失った彼らにとって変わるべき生命力に溢れた、メラーズに代表される下層階級への賞賛という、ロレンスが人生の最後に到達した哲学から生み出された作品であるとしばしば考えられている。確かに『チャタレー夫人の恋人』は、当時のイギリス社会に対する鋭い洞察と呵責なき批判からなるアンチテーゼであり、かつ当時の読者層にとって非常にショッキングで受け入れがたいストーリーである。この小説は、田園地帯と炭鉱地区、農業と工業、上流階級と労働者階級、といった紋切型の二項図式を崩し、支配階級と下層階級の相互依存と共犯関係を暴き、20世紀初頭のイギリス社会を炙り出す。

しかしその一方でこのテキストには、当時流布していたイメージや思考の枠組みが取り込まれている。改稿を通して森番は非階級化され、最終稿のメラーズは政治的に社会の安寧を揺るがすような労働者階級でも共産主義者でもない。この非階級化された人物に、知性や優しさ、親密さといったブルジョア・イデオロギーが重視する要素が付与され、優生学的にも問題のない田舎の農民という美化されたイメージが重ね合わされる。ここに『チャタレー夫人の恋人』のアンビバレンスがある。このテキストは、抑圧的で融通のきかない社会の中で真の愛を貫こうとする恋人たちの姿を通して「悲劇の時代」の過酷な現実をあらわにしながら、同時にイギリスの田舎とそこに暮らす人々を美化するブルジョア神話を承認する。そのため階級を超えた不倫という物議をかもしストーリーを描きながらも、そこには当時の思考の枠組み、支配的言説が取り込まれており、中産階級の懸念を払拭し、理想を描く物語ともなっている。ただしこのアンビバレンスは、文学テキストとしての亀裂や欠陥を意味しているのではない。むしろこのことは、『チャタレー夫人の恋人』というテキストが、作者の哲学を表明するためのモノロジックな小説ではなく、嫌悪を催させながらも魅惑を放つ20世紀初頭という特殊な時代の空

気の中から生み出された、豊穡な読みの可能性を含んだテキストだということなのである。

#### 注

- 1) ロレンスはタオス在住の友人メイベル・ドッジ・ルーハンに宛てた書簡の中で次のように書いている——「小説にかかりきりです。『ジョン・トマスとレディ・ジェイン』というタイトルにしたいのですが(ジョン・トマスは男性器の俗称です、おそらくご存知と思いますが)、しかしこれは副題としておいて、『チャタレー夫人の恋人』という形で進めなければなりません、出版社対策で」(6L 318)。ちなみに「レディ・ジェイン」の俗称についても同様のことが言える。
- 2) 古典的例を挙げれば、Scott Sanders は、この小説は6つの二項対立、すなわち自然／文化、森／ラグビー邸、労働者階級／支配階級、身体／知性、沈黙／言語から構成されていると論じている。Sanders 191 参照。また全く異なる角度からの分析であっても、テキストを二元論的に解釈しようという傾向は顕著である——「『チャタレー夫人の恋人』は、セクシュアリティを秘密主義から救出し、言語化することが必要であるという認識と、セクシュアリティを言語で再創造しようとする、否応なく必ず言語の抵抗にあうという認識の、二つの相反する考えの間に生じる緊張関係に関する探求の書と言えるのである」(Blanchard, 133)。
- 3) *Lady Chatterley's Lover* からの邦訳に際し、武藤浩史氏および木村政則氏の邦訳『チャタレー夫人の恋人』(それぞれちくま文庫、光文社文庫)を適宜参照させていただいた。また本稿では、石炭を採掘する鉱山を「炭鉱」、石炭を採掘するために掘った穴を「炭坑」と表記する。従って採炭夫は「炭坑夫」とする。
- 4) ロレンスは、パリ版の序文をリライトした「『チャタレー夫人の恋人』について」の中で、「第1稿を読み直した時に私は、クリフォードの不具が、ある種の麻痺を象徴していること、すなわち彼と同種の人々や同じ階級の人々の大部分に今日見られる、奥深いところでの感情や情熱の麻痺を象徴していることに気がついた」(LCL 333)と書いており、批評家たちもこの言葉に引きずられているように見える。しかしロレンス自身が「芸術家を決して信じるな。物語を信じる」(SCAL 14)と言っていたのではなかったか？
- 5) 例えば先述の Sanders はこの場面について、「コニー・チャタレーは、ロレンスが炭坑地区を回ったドライブを再現している」(175)と論じている。また Ferrall と McNeill は、「ロレンスのこの絶望感と過激さの終末論的結合は、少なくとも部分的には、[ゼネストにおける]炭坑夫たちの敗北の結果である」と論じている(85)。
- 6) 例えばマスターマンは19世紀末のイギリスについて、「社会主義とアナーキズムが労働者の寄せや大都市の職人たちの間に様々な形で急速に広まっていった」と論じている(*Heart of the Empire* 2)。またロレンス自身も『ヨーロッパ史のうねり』の中で、19世紀後半の

バリについて「社会主義，共産主義，アナーキズムが盛んに喧伝された」と書いている（MEH 250）。

7) James 307-08 参照。

8) Dowbiggin 133-78 も参照のこと。

9) 『チャタレー』の分析の際にも批評家たちは森のこのイメージにしばしば引きずられている。例えば Sanders は森をエデンの園に例えながら、「最後に残った無垢の地であるシャーウッドの森で，恋人たち〔コニーとメラーズ〕は原初の一体感を取り戻すのである。それは意識，そして知性の寒々とした道具，すなわち言語によって分断されてしまった男，女，自然が調和した状態である」（201）と論じている。

#### Works Cited

- Blanchard, Lydia. "Lawrence, Foucault, and the Language of Sexuality." *D. H. Lawrence*, edited by Peter Widdowson, Longman, 1992, pp.119-34.
- Booth, William. *In Darkest England and the Way Out*. International Headquarters of the Salvation Army, 1890.
- "Canada's Nordic Needs." *Times*, 25 May 1923, p. 11.
- Dowbiggin, Ian Robert. *Keeping America Sane: Psychiatry and Eugenics in the United States and Canada, 1880-1940*. Cornell UP, 1997.
- Ferrall, Charles, and Dougal McNeill. *Writing the 1926 General Strike: Literature, Culture, Politics*. Cambridge UP, 2015.
- "Immigration and the Unfit." *Times*, 26 May 1923, p. 11.
- James, Lawrence. *The Rise and Fall of the British Empire*. New ed., Abacus, 1998.
- Lawrence, D. H. *The First and Second Lady Chatterley Novels*. Edited by Dieter Mehl and Christa Jansohn, Cambridge UP, 1999. [FLC]
- . *Lady Chatterley's Lover and a Proposal of "Lady Chatterley's Lover"*. Edited by Michael Squires, Cambridge UP, 1993. [LCL]
- . *The Letters of D. H. Lawrence*. Edited by James T. Boulton et al., vol. 6, Cambridge UP, 1991. [6L]
- . *Movements in European History*. Edited by Philip Crumpton, Cambridge UP, 1989.
- . *Studies in Classic American Literature*. Edited by Ezra Greenspan et al., Cambridge UP, 2003. [SCAL]
- Masterman, C. F. G. *From the Abyss: Of Its Inhabitants by One of Them*. R. B. Johnson, 1902.
- . *The Heart of the Empire: Discussions of Problems of Modern City Life in England, with an Essay on Imperialism*. 2nd ed., Fisher Unwin, 1907.
- Morton, H. V. *In Search of England*. Methuen, 1927.
- Parcq, Herbert Du. *Life of David Lloyd George*. vol. IV, Caxton, 1912.
- Sanders, Scott. *D. H. Lawrence: The World of the Five Major Novels*. Viking, 1974.